



Title	クリスティアン・ヴォルフの心理学における「想像力」
Author(s)	福田, 覚
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2002, 2, p. 39-54
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/77691">https://doi.org/10.18910/77691</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# クリスティアン・ヴォルフの心理学における「想像力」

福 田 覚

精神史では、一時代を築いた思想、多大な影響をもった思想から、相反する結論が引き出されていることが珍しくない。それは、異なる陣営から、自説に有利な結論が取り出された証左である。逆に、そうした思想が批判の対象となる場合には、自説との対立点が強調される形で矮小化されやすい。そのため、ある思想が次の世代に乗り越えられたという後々の説明もまた、無意識のうちに勝利者史観に与して、次の世代の矮小化を伴った批判を、そのまま乗り越えの歴史の実像だと誤解しやすくなっている。こうした受容についての一般的な警告は、精神史がヴォルフ哲学を扱うときにも重要である。

クリスティアン・ヴォルフ (1679-1754) は、膨大な哲学体系を残したが、芸術や美の問題に関する書物は書かなかった。通説では、バウルガルテンの『美学』(1750, 1758) が未完ながら後にその仕事を果たしたと考えられている。しかし、そうしたヴォルフーバウムガルテンという系譜とは別に、ゴットシェートやブライティンガーなど、啓蒙主義時代の詩学書にも、ヴォルフからの強い影響を認めることができる。もともと、このようなもう一つの系譜は、個別的・各論的な影響関係を認定する形で語れてきたという印象が強く、バウムガルテンの『美学』を近代美学誕生の分岐点として描く精神史記述と積極的に対比するような形では語られていない。

本稿は、啓蒙主義時代の一連の詩学に大きな影響を与えたと推定されるヴォルフの想像力概念について、原典の一つである『ドイツ語形而上学』に立ち帰って、その基本線を検証するものである。想像力概念の体系内での位置に焦点を当てた素描をひとまず課題とし、後の詩学史を書き換えるための基準を明確にできればと考えている。

少なくとも本稿では、ヴォルフ哲学そのものを直ちに再評価したいわけではないので、『ドイツ語形而上学』を吟味してきた従来の研究史については、この段階では態度を保留しておく。むしろ、『ドイツ語形而上学』を評価する文脈を調整し、ヴォルフ以後の詩学書と対比し、模倣概念の再検討によって詩学史を再構築する中で、両者を合わせて相対化することに狙いがある。本稿はそのための準備作業である。

## 1 『ドイツ語形而上学』とその心理学

記述言語と記述対象から一般に『ドイツ語形而上学』と呼び慣わされている著作は、『神、

世界、人間心理、全事物一般についての理性的考察』<sup>1</sup> というのが本来の名称で、初版の出版年は「1720年」となっている<sup>2</sup>。生前最後の版が1752年の第12版であることから窺い知れるように、この著作は、広範な議論を呼び起こした成功作であった。『ドイツ語形而上学』は6章の構成で<sup>3</sup>、想像力概念を軸に検証を試みようとする我々の関心を引くのは、人間精神について経験的または先験的な観点から論じている第3章と第5章である。第3章と第5章は、ラテン語の著作では、『経験的心理学』(1732)と『理性的心理学』(1734)にそれに相応した議論が見出される<sup>4</sup>。

「心理一般について」経験的に論じる『ドイツ語形而上学』の第3章は、「我々が心について知覚している事柄」を記述する<sup>5</sup>。第3章が論じるのは、心について、誰もが自らに注意を向ければ認識できることである。「心 (Seele)」という言葉で理解されているのは、「自らや自らの外に事物を意識しているもの」 (§ 192) で、「意識する」ということが規定の中心にある<sup>6</sup>。一般に、我々の思考は、明晰な場合もあれば混乱している場合もあり、判明な場合もあればそうでない場合もある。第3章は、そうした観点を大枠としながら、日常において経験される種々の心的状態が分類され、精神の諸能力と対応づけながら論じられている。感性、想像、記憶、認識、判断、言語、経験、推論、理性といった精神活動が順次テーマとして取り上げられる。想像は、判明でない認識の一形態である。そのような位置づけとなるのは、厳密な判断や推論が最高の形で行われる数学的認識が、ここでの理論構築において規範となるイメージを提供しているからである。第3章ではさらに、我々が経験する種々の情動の問題や、意志と自由の概念についても論じられ、章の最後には、心身の関係にも議論が及んでいる。

「心理の本質について」扱う第5章では、第3章で記述した人間精神の経験的な側面に対してその基盤となっている精神の本質的な側面が解明される<sup>7</sup>。想像力については、知覚、記憶、夢といった問題とともに、心身の予定調和的な関係を探る議論の枠組みの中で論じられている。また、普遍的認識、理性的推論、理性の使用といった精神活動の本質が、表象能力という観点から説明され、章の最後には魂の不死性といった問題も取り上げられている。

こうした形で展開されるヴォルフの心理学の最大の特徴は、論理学を下敷きにしていることである。2つの章にわたる心理学部分でそのベースになっていて、ある種のリズムを創り出している議論は、よく知られた、明晰判明知という考え方で、第3章でも最初にこの観念が導入されている。これは決して『ドイツ形而上学』で初めてなされた議論ではなく、すでに『ドイツ語論理学』(初版1713)で展開されていたものである<sup>8</sup>。とりわけ『ドイツ語形而上学』の経験心理学では、我々の内なる思考を規定するのに、『ドイツ語論理学』の概念の分類法が転用されている。『ドイツ語形而上学』では、内なる思考の「明晰性は、種々のものの違いに気づくことから生じる」、と言われている (§ 201)。また、内なる思考の判明性は、思考の「諸部分について明晰な思考を得て、その結果、諸部分を互いに区別できる」ことから得られる、とされ、たとえ諸部分の違いを規定できなくても、全体につ

いて判明な思考を有する、と述べられている (§ 207)。こうした考え方は、例えば、知覚の経験とは次のように結びつけられている。五感の知覚には様々な明晰性のものがあり、太陽の光よりも僅かな知覚しかもたらさない星の光が昼間は見て取れないように、明晰な知覚は不明な知覚をほとんど感じ取れなくしてしまう (§ 224)。つまり、知覚の場合、ある程度の強さを有することが、他と区別するだけの明晰性を有する条件となっている。

しかし、次に見るヴォルフの想像力概念は、こうした明晰判明知のモデルを前提としながらも、概念の明晰化とは異なる思考の運動を描き出している。

## 2 想像の定義と機構

『ドイツ語形而上学』第3章の前半、明晰判明知の観念が導入されて以後の部分は、大まかにいえば、精神の諸能力の一覧を通覧するという形で記述が進められている。感性から理性までの諸能力が、「・・・とは何か」という定義から説き起こされる形で、順次詳述される。それに引き続いて、後半で、意志や情念など、より実践的な側面における精神の諸現象が順次解説される。ここでは、第3章前半で取り上げられる「想像力」の経験的な側面に目を向けてみたい。

「そこにはない事物の表象は通常、想像と呼ばれる。そして、こうした表象をもたらす心の能力は想像力と呼ばれる。」 (§ 235)

これが、この書における想像力の定義である。明晰・判明という分類基準に立てば、想像力が下位の認識能力に属することは、次のような文章から明らかである。

「可能的なものを判明に表象する能力が悟性である。この点で悟性は、感覚や想像力から区別される。つまり、感覚や想像力が単独では、表象はせいぜい明晰で、決して判明ではないのに対して、悟性がそこに加わると、それが判明になる。それゆえ、誰かが我々にある物事について、それを想像することはできても、何も言うことができない場合、つまり、思考に判明性がない場合、我々は、それは理解されていない、と言う。」 (§ 277)

この章の中での位置から言えば、「想像力」が置かれているのは、感覚と記憶の間ということになる。感覚は、身体的な変化に根拠があって、「我々の外部の物体によって引き起こされている思考」のことを言うときれているので (§ 220)、そこにはない不在の事物の表象である想像は、感覚と比較すると、対象の不在がその特徴である。経験心理学的に、精神に感じられる形で感覚と想像の差異を特徴づければ、両者の特徴的な違いは、明晰性の違

いということになる。鮮明度を区別の基準としてきた伝統的な心理学の考え方を、ヴォルフなりに踏襲していると言える。

「想像は、知覚のなかに含まれていたものをすべて明晰に表象するわけではないので、想像には大いに不明確さがある。そしてその点で知覚と異なっている。それどころか、そうした点を通じて我々は前者を後者から区別するのが常である。」 (§ 236)

「想像だけがあるときは、より大きな明晰性を有しているように思える。そのため、想像が知覚と見なされることもある。我々はそうしたことを夢で見出す。つまり、我々はその場合知覚をもたず、少なくとも目に付くほどの知覚をもたないので、判明なものに関わってこない区別には気がつかないのである。というのも、我々が明晰にしか思考しないものは、互いに突き合わせる以外に区別することができないからである。」 (§ 237)

記憶との区別については些か注意が必要である。「記憶」とは、「我々がかつて有していた思考について、それが再び現れた場合に、かつてそれを有していたと再び認識する能力に他ならない」 (§ 249) とされ、我々の語感に反して、ヴォルフは、「記憶」を「思考を保管して別の時に再び取り出して与える能力」 (§ 250) とは考えないように警告している。かつての思考を想起したとき、不在の事物を表象することが想像力の働きで、そうした思考が以前にもあったということ認識する部分のみが記憶の働きである。こうした定義は、想像力と記憶が隣接していて、共同して作用するほど近いものであることをうかがわせる。

想像力のメカニズムは、明晰判明知の規則と同様に、構成要素に分解する考え方に立脚して説明される。これは後述する「結合術」に通じる考え方でもある。想像は、基本的に、かつての感覚知覚に由来するものだが、そこには幾つかの類型がある。最も基本的な想像の形は、かつて有した感覚知覚を再現する想像で、それは、現在の感覚の一部が過去の感覚の一部でもある場合に、その過去の感覚の全体を呼び覚ます、という形で起こる。

「我々の感覚が我々に、別の時に有していた感覚と共通したものをもっている何かを表象させる場合、別の時に有していた感覚が我々に再び現れてくる。つまり、現在の感覚全体の一部がある過去の感覚の一部であるという場合に、過去の感覚全体が再び現れてくるのである。そして後者がまた、別の時の感覚や想像と何か共通したものを持っていたら、我々にはそれがさらにまた再び現れてくるのである。このような形で、想像は常に次々と入れ替わって現れる。」 (§ 238)

一般に、夢という現象も想像の一種であり (§ 239)、このような連続的な想念の流れの中で、時には非現実的な飛躍が同じメカニズムに基づいて起こるとされている。夢に秩序が

ないのは、そもそもの想像の連鎖（先行する想念A→先行する想念Aの一部→後続の想念Bの一部→後続の想念B）にAとBの部分的な類似という以外の根拠がないからである（§ 240）。

ヴォルフはさらに、単に過去の知覚を呼び出すだけの再現的な想像ではない、かつて知覚したことのないものを想像する創造的な想像についても、そのメカニズムを説明している。その説明の仕方は、構成要素の組み替えによって新たな想像が成り立つという、再現的想像の場合と似たような考え方に拠っている。この創造的な想像には、2つのタイプがある。

「第一の在り方は、我々が実際に見たことのあるものや単に絵の形で目の前にしたことのあるものを、思いのままに分解したり、様々なものの部分を思いのままに組み合わせる、という仕方である。それを通じて、今まで見たことのないものが現れてくる。・・・そしてこの点に、我々がしばしば可能ではない何かを創り出す創作の能力が存する。それ故、空虚な想像と呼ばれたりするのである。」（§ 242）

「見たことのないものを想像力がもたらす別のやり方は、充足理由律を用いる。そして、真理が含まれているイメージを産み出すのである。彫刻家が彫像を想像する元になるイメージもこれに属する。・・・また、建築家が建築術の規則に従って思考の中に想起した建物のイメージもここに属する。」（§ 245）

どちらも、過去に知覚するなどしたものの構成要素を集めて結合することで、これまでに知覚したことのないものを産み出す。両者が異なるのは、その結合に十分な根拠があるか否かという点である。

前者の説明の際にヴォルフは、想像は制御できない、ということも述べている（§ 243）。敷衍して言えば、aとbとcという構成要素を組み合わせて新しいものを想像しようとしても、自分の意に反して、aという構成要素をもつ過去の知覚Aが現れてしまい、さらにそれに引き続いて、Aの一部のa'がきっかけとなってA'が現れてしまう、ということが起こる、としている。これは夢の論理と同じことで、想像の連鎖のメカニズムが、意志の及ぶ範囲を越えて、言わば身体の外で自動化されていることを示している。

後者の説明は、芸術的な想像には充足理由律が求められることを示唆している。その具体例に彫刻家と建築家が挙げられているのは、興味深く感じられる。彫刻家は、人間という種の美しい部分を集めて彫像の元になるイメージを想像するが（§ 245）、彫刻家の考慮する充足理由律とは、その際に均整のとれた彫像にしなければならない点を述べているものと推測される。建築家の場合には、結合の根拠は明確に「建築術の規則」と言われている。建築家の発明術は、基本的な部分で想像力による結合に依拠していて、現実の建物や設計図から色々と集めたものを組み合わせて新しい設計図にするが、このときに、充足理

由律に基づいていることが完全な建築物をつくる条件になる (§ 246)。ヴォルフは、こうした術は、他の芸術家や学者、説教師にも必要になってくる、と述べている (§ 247)。

こうしたヴォルフの説明から、想像力の基本的な捉え方が見えてくる。そこでは常に、目の前に存在しないものの全体的なイメージの獲得が問題になる。イメージを獲得する過程は、イメージを分解する論理的な分析とは逆の方向で進み、構成要素となる部分からイメージの全体へという動きになる。想像は、無意識のうちに起こることもあれば、意識的に行われることもある。夢に典型的に見られる無意識的な想像では、あるイメージからある構成要素を選び次のイメージへというプロセスが瞬時に進むが、ここでの連関に根拠はない、とヴォルフは単純に考えている。無意識的な想像の連関を解明するのは、後の時代の精神分析の仕事である。建築家を例に語られた、十分な根拠をもった連関によって全体像をイメージする方法は、単なる想像力の域を越え、合理的な推論過程を思わせる。このことが逆に、論理的な推論過程を機軸とした結合術のイメージによって想像力の問題が捉え返されていることの証左であるように思われる。充足理由律に基づいた想像を芸術家に称揚する下りや、意識の統制下に入らない想像の恣意的な連鎖を無秩序と呼ぶ辺りに、従来から合理主義者と呼ばれてきたヴォルフの姿を明確に確認することができる<sup>10</sup>。

### 3 記号操作と象徴的認識

想像力、記憶力、注意力について説明されたあと、『ドイツ語形而上学』第3章前半の記述は、狭い意味での悟性概念の説明に転じ、認識、判断、推論といったより高度な論理学的能力をテーマとするようになる。想像力や記憶力が他の分析的な諸能力と提携することの意味を探るために、また、想像力や記憶力の概念が置かれている文脈を把握するために、引き続き悟性概念について幅広く説明されている部分から、言語記号や発見術について述べた箇所に目を向けておきたい。

ヴォルフは、言葉を恣意的な記号と捉え<sup>11</sup>、言語の習得を記号の習得と捉えている<sup>12</sup>。一般的な記号関係についてのヴォルフの考え方は、AはBであるという論理的な判断の場合と同様に、結合という観念を基礎としていて、記号を成立させる結合の具体相は、二つのものの併存や継起といった隣接関係を想定したものとなっている。

「二つのものが常に同時に存在しているか、あるいは、いつも引き続いて現れる場合、いつも一方は他方の記号である。こうした記号は自然的記号と呼ばれる。例えば、煙は火の自然的記号である。」 (§ 293)

「我々はまた思いのままに、通常なら一緒になっていることのない二つのものを一緒にして一つの場所にもってこることがよくある。そうして一方を他方の記号にする。

こうした記号は恣意的記号と呼ばれる。ここには、職人や芸術家の紋章、特定の身分や家柄に属する人たちの特別な衣装などが含まれる。」(§ 294)

そして、想像力や記憶力が、こうした記号関係を確立する過程においても関与する能力として想定されていることが、言語の習得についての説明から読みとれる。

「我々は事物を知覚し、しばしば同時にその名称を聞く。それによって我々は、名によって意味された事物を表象したとき、想像力によってその名を再び表象することができるようになるのである。逆に、名を聞いたりそれについて考えたりしたときに、事物を表象できるようになるのである。これとは逆に、記憶は我々に、こうした名前が我々や他の人々が日頃いつも事物に与えているものであることを保証してくれる。」(§ 297)

こうした説明は、記号が不在のものの記号であるためには想像力が必要で、そうした不在のものとの記号関係が恒常的に安定したものであることは記憶によって保証される、という意味に理解することができる。先に見た想像力の規定では、AとBが部分を共有するとき、Aから不在のBを想像することが語られていたが、AがBが空間的・時間的に隣接した関係にあるとき、あるいはそこから恒常的に記号関係が派生してきているときに、Aから不在のBを想像することも想像力の在り方に含まれていることが分かる。

こうした記号論は、直観的認識／象徴的認識という概念を導入することで、さらに深められていく。記号は、象徴的認識の基礎になる。ヴォルフの説明によれば、「我々は事物そのものを表象するか、あるいは言葉や他の記号を通じて表象するかのどちらか」で、前者の認識形態が直観的認識、後者が象徴的認識と呼ばれる(§ 316)。

象徴的認識の利点は、普遍的な認識を獲得する足場になるという点である。判明ではない感覚的な知覚から出発するとき、言葉や記号を用いることで、事物の中にあるいは事物と事物の間に、差異や類似が見出されるようになる。我々はそうした類似から普遍的な概念へと到達する、という(§ 319)。概念が判明であることの定義は、識別のためのメルクマールを列挙できることなので、言葉や記号についてある事物のメルクマールとして妥当するかどうかを吟味すれば、分析が進み、その事物についての概念の判明性が増すことになると思われる。普遍的な認識を形成するときは、自分自身に語りかけたり、そのために必要な言葉を考える、という指摘をヴォルフが加えているのにも(§ 322)、同種の事情があると言える。

ヴォルフはまた、概念の相違を見出すだけでなく、「AはBである」という判断を下す場合でも、象徴的認識の方が直観的認識よりも判断の相違をより明晰に把握でき、従って判明性の度合いが高い、という意味のことを述べている(§ 321)。その際にヴォルフが挙げている理由は、直観的認識は心の働きも思い描く必要があるから、という些か分かりづら

い理由だが、おそらく、直観的認識には事物の観念が欠かせないのに対して、象徴的認識は観念の記号である言葉の操作だけよく、その言葉がそのまま判明性の根拠であるメルクマールになるので、象徴的認識の方が有利だ、ということを述べているものと思われる。それは、象徴的認識の欠点として、「概念と結びついていない空虚な言葉を認識と思いこみ、言葉を事物だと思い込む」落とし穴があると書き添えていることと（§ 320）、裏表の関係にあると考えられる。この象徴的認識の問題点を、ヴォルフは次のようにも言い換えている。

「にもかかわらず、事物を意味する言葉は、事物について何も判明なものを表していない（というのも、例えば、真理という言葉は、真理について何も表していないから）。それゆえ言葉というのは、単に記憶の中で、我々が概念を有しているある種の物事を意味しているということが思い出される場合にのみ理解できるものなので、つまり、直観的認識を思い起こす形でのみ理解できるものなので、日常の言語に基づいている象徴的認識もまた、それ自体で確実なものでもなければ、明晰なものでもないのである。」（§ 323）

重要なのは、記号が観念との靱帯を確保しているということであり、記憶力がその橋渡しの役を果たしていると言える。

しかし、この文章に続く次の文章は、記号を観念から完全に切り離した上で、象徴的認識に明晰性や判明性をもたらす術もある、ということを示唆する文章になっていて、我々の新たな関心を引く。

「象徴的認識にも明晰性と判明性をもたらすことは可能である。つまり、象徴的認識がまさに、ある物事の中にあつて、他の物事との区別を可能にするものを、いわば現前化させることは可能である。この区別を可能にするものに依拠して、概念に等しい価値をもつ複合的な記号が相互の関係を維持し、事物相互の状態もそこから見て取れる、という形でそれは実現する。このことの実例は、代数学に見出せる。・・・しかし記号を結合する術——それを我々は記号の結合術と呼ぶことができる——は、記号術が目下のところ考案されていないのと同様、まだ考案されていない。・・・まだ今のところ、こうした術について理解できている者はわずかしかない。概念を感覚や想像力のあらゆるイメージから完全に切り離し、単なる記号にすることができ、その記号を巧みに組み合わせてあらゆる可能的な真理をもたらすことができる、というレベルの学問ということになると、きわめて少ない。そのため、ここではこの術については語ることはできない。」（§ 324）

表現の曖昧さは否定できない文章で、ヴォルフ自身、「記号結合術」についてはまだ語れな

いとしているわけだが、記号相互の関係から事物相互の状態を見て取るという下りがヒントになると思われる。おそらく、個々の記号を観念と切り離れたとしても、記号間の関係性が事物相互の関係性を表象する形で世界との靱帯が保たれ、記号だけが空虚に浮遊するという事態に陥らない、ということが眼目と推測される。「代数学」にその実例が見出せると言われているが、この時代の観念では、代数学は、証明するだけの幾何学と違って、分析によって発見する学と考えられていた<sup>13</sup>。問題は、プログラムとして記号の関係性に事物の関係性を表象させると言ったところで、その理想論をどのように実現し、記号の世界と現実の世界との間の靱帯をいかに保証していくか、という点にある。ヴォルフは、ライプニッツが1675年の日付の書簡で、この術の着想を得たとしていること、しかし、1714年3月の書簡でもまだこの術を試すには到っていないと述べていることを紹介して、記号結合術はまだ考案されていないと強く印象づけている。実際のところ、こうした話題は、言語や記号のネットワークが事物の世界の構造を正しく反映していることの検証をどう行うか、複数の記述系がありうる可能性をどう考えるか、といった今日の科学哲学の課題にも通じるものであり、現在の我々の感覚からしても、十全な解決案が容易には見出されない大きな問いに感じられる。

ここまでの話を総合すると、想像力とは、不在の観念を呼び出す能力で、観念から観念を呼び出す場合もあれば、記号から観念を呼び出す場合もある。ある観念がすでに別の観念の記号となっている場合もあるので、観念か記号かの線引きは厳密にはできない。言葉などの記号が観念と靱帯を保つことは、空虚に記号だけが浮遊することを好まないヴォルフの戦略からすれば重要なことで、その意味で、記号の世界と観念の世界を結びつける想像力の働きは欠かせない。

先に見たように、夢などに典型的な観念から観念への想像は、厳密にはその中間に、観念の構成要素から観念へという動きを介在させている。つまり、想像力の働きの中にも、構成要素のレベルと全体的なイメージのレベルとの間の運動が含まれており、意志の制御を逃れて身体的に自動化されて行われている想像は、このレベルの間で、自然などは必ずしも言えない、多分に恣意的な、記号操作に類する結合を行っている、とすることができる。想像を意識的に制御し、全体的イメージの構成に根拠をもたせるようになると、設計図を書く建築家の想像力の例に次第に近づく。この場合、構成要素間の関係性が掌握され、その上で、全体的なイメージのレベルに要素が統合されている。事物の構成的契機のレベルを言語化すると、認識の判明性が増し、悟性による制御が一段と進む。いま見たように、記号を用いた象徴的認識が普遍的な認識を獲得する足場になるのは、記号がメルクマールとなって事物の構成的契機を言い当てるため、この場合の記号操作はすでに、想像力の場合のような原初的な結合とは異なり、悟性の統括する論理的関係となる。記号結合術というのは、さらにその先にある、記号を用いて論理的に関係性の地図の作成を試みるという話である。

こうして見ると、想像力についての議論の下敷きには、論理的な結合術の構図があり、

記号論を間に挟みながら、一貫した狙いで記述が進めていることが分かる。想像力の働きのベースにある結合関係は、記号関係の原初的な形態で、必ず観念へと結合する直観的なものであり、その分、相対的に悟性による制御は利きにくい。

#### 4 想像力を基礎とした精神活動

分析を進めて判明性を高めるということは、見方を変えれば、悟性による対象理解の制御を高めるということであるが、分析的な理解は、記号の操作性を高める余り、観念との靱帯を失うことがあってはならないのであった。しかし、論理学が記号の操作を追求する目的は、最終的には、既知の知識から未知の知識に到達することにあるはずである。また、ヴォルフ以降の詩学の文脈で想像力が主題として取り上げられるのも、単に観念を再現するからというよりは、それが未知のものを創り出すからである。そうした観点から、第3章前半の発見術について論じた部分も一瞥しておきたい。

ヴォルフは、「経験」や「推論」について論じた後、「理性」とは何かという区切りの問題に移る前の位置に、「発見術」についての議論を置いている。

「すでに知られた真理から、我々にまだ知られていない別の真理を導き出す場合、通常、我々はそれを発見すると言う。また、未知の真理を周知の真理から導き出す知識を発見術と言う。」 (§ 362)

「推論する技術によって、幾つかの周知の命題から、我々に前もって知られていない他の命題を導き出すことができるので、推論はまだ知られていない真理を発見する手段である」 (§ 363)

このように述べた後、ヴォルフは、しかしながら、論理的な推論だけが発見のための唯一の手段ではないとして、未知の問題の解決のためには、類似性を利用して、未知の問題を周知の問題に変換するという手段も有効であることを説いている (§ 364)。例えば、自然状態の人間の義務というものが分かっているなら、社会における人間の義務は、自然状態で生活している人間に還元する形で認識される、といった例が挙げられている (§ 365)。そして、こうした変換をなすには、類似性に容易に気づく能力である「機知」が必要で、推論による発見にも機知は欠かせない、と述べられる (§ 366)。結局、ヴォルフにとって発見術というのは、悟性による部分と機知による部分とによって構成される諸規則ということになっている (§ 367)。

ここでは、観念やイメージの現前が問題になっているわけではないので、想像力は直接的には関わってこない。機知のことが書かれている位置は、概念的把握や判断の話が終わ

り、推論について議論がなされている段階で、もうすでに最も高度な段階の論理学的能力に議論が及んでいる。しかし、類似性に気づくということは、以前の段階からすでに繰り返されているモチーフでもある。最も基本的な想像の在り方の説明では、イメージAからイメージBを想像することは、AとBの間で類似している部分を媒介にして行われた。また、記号による象徴的認識が普遍的な認識を獲得する足場になるのは、記号によって事象間の類似が名指されるからであった。こうして考えると、ヴォルフによる「機知」という能力の記述は、確かに推論段階の議論で初めて登場するが、より広い意味で「類似を見抜く力」を考えれば、それは、概念の段階にも判断の段階にも見出され、想像力とも深い関わりをもつ能力だと言うことができる。

また逆に、ヴォルフ以後の「想像力」概念を念頭において捉え返してみるなら、ヴォルフは想像力を観念の現前という文脈に限定していたとしても、後に想像力は自然の模倣に對置され、広く「未知のものを創造的に思い描く能力」という意味合いを強めていくので、ここで機知の能力について語られたことは、そうした意味でも、想像力の問題圏に深く関わっていると見ることができる。ヴォルフの議論でもすでに、想像力は、かつて知覚したものを再現的に想像する場合以外に、かつて知覚したことのない未知のものを構成的に想像する場合が検討されていた。

私見では、ヴォルフ以後の詩学史は、こうした想像力と機知の関係が隠れたテーマである。想像力は機知の能力に接近し、機知の能力の位置付けも、ヴォルフの与えた位置に固定されてはいないように思われる。総じて、想像力は記憶に近い位置にあるときはより再現的で、機知の能力に近い位置にあるときはより発見的と言ってみてもよい。ヴォルフの言う連想能力といった観の強い「想像力」が狭い意味での想像力なら、それに機知の能力を加え、発見的創造のニュアンスを強めた「想像力」という言葉遣いが広義の想像力概念ということができる<sup>14</sup>。

さらに、第5章の「発見」をテーマとした部分に目を移すと、想像力は、類似を知覚する機知の能力の基礎であると明確に述べられている。ヴォルフは、「機知は、鋭敏さとよい想像力および記憶力によってもたらされる」 (§ 858)、と規定している。鋭敏さとは、同じ事物から多くの判明な認識を獲得し、それだけ多くのものを発見できる能力を言うことされていて (§ 850)、それと共通したものをもつ他のものを想起させる想像力や、多くのことを覚えている記憶力と相まって、隠された類似の発見に貢献するというシナリオをヴォルフは描いている。そして、その機知や推論の技術がさらに発見術を構成する。物事の発見には、実験などによって苦労して得られたものと、機知や鋭敏さや推論の技術によってもたらされたものがある、という主旨のことをヴォルフは述べていて (§ 862)、ここに、過去の想像－類似の知覚－真理の発見と続く、さらなるシナリオを見て取ることができる。第5章の議論は、第3章までの議論の背後にあったヴォルフの構図をもう一度より明確に示してくれていると言える。

この第5章は、心の有り様についての日常の経験がそこから演繹的に説明されるような

「心と精神一般の本質」を解明することを課題としている。ヴォルフは、物事を意識し、我々自身を意識する意識が成立する条件から議論を始めた後、心がもっている「身体の状態に応じて世界を表象する能力」が、これまでに経験的に観察されてきた心のすべての能力の基礎にあること (§ 753,754)、心身の調和は「予定調和」という観念によって説明されること (§ 760-768)などを、心の本質を理解するための基本図式として提供している。知覚も想像も表象であり、そのことは、経験心理学において観察されたことから容易に確認される<sup>15</sup>。

その上でヴォルフは、第5章においても、想像力の働きを過去の状態を表象することであると改めて規定している (§ 807)。心による表象は、「現在の状態だけでなく、未来や過去の状態にも及ぶ」が (§ 808)、現在や未来についての表象の仕方と、過去に対する表象の仕方は異なる、と言われる。

「心が現在や未来の状態について認識することはすべて互いに基礎づけられている。逆に想像力が過去の状態について表象することは、すべて互いに基礎づけられているわけではない。」 (§ 810)

未来は現在の延長上に継起してきて、そのようなものとして表象されるのに対して、過去は過去から現在が継起した自然の系列とは独立に、想像力が現在と共通するものを過去に探し出して過去を表象するので、自然の継起する系列と想像力の連鎖の系列は異なる、というのがここでの議論の主旨である。想像力が「自然のなかでは、同時には存在し得ないものや、継起しえないものをもたらしたりする」 (§ 810) 理由もここにある。

普遍的な認識は、こうした想像力の系列から生まれてくる、と考えられている。我々が種や属という概念をもつようになるのは、想像力が介在して、何かを共有している過去の知覚を呼び覚ますからである、ということをヴォルフの文章は示唆する (§ 832)。そのため、普遍的な認識に達するには、過去を明晰判明に表象する強い想像力と、すべてのものについてすでに知覚したことを想起する強い記憶力が必要とされる (§ 833)。

結局のところ、「過去の想像—類似の知覚—真理の発見」という流れの中にあっては、想像力の独自の系列も、いずれはまた根拠づけられた自然の系列へと回収されていくと言える。狭い意味での「想像力」は、時に制御の利かない独自の連想の系列によって観念の連鎖を創り出すが、より高次の分析的な悟性能力と協調して働く中では、真理の連関を見出すことに貢献する。しかしまた、芸術的な創造のように、自然の系列には回収されず、新たなものを産み出す場合もある。これは先に、第3章の想像力の規定で見たとおりである。

## 5 ヴォルフ以後

一般に想像には、経験的な基礎と、そこから離れようとする契機とが同居している。そのため、現実には存在しているものの再現なのか、現実にはあり得ないものの自由な空想なのか、その概念規定には自ずと幅が生じることになる。古代以来、精神史にはそうした揺れが記録されている。像を想うと書くが、像としての性格を強調するか、そうした具象性への限定を好まないかによっても、概念規定には揺れが生まれている。

ヴォルフの場合、想像力は、全体としては論理学の構図の中に位置付けられている、論理学的な悟性とは異なる独自の精神の働きである。論理学が演繹的に論じる、不可能ではないという可能性と、想像力が独自の規則によって垣間見せる、現実から遊離する可能性とでは、「可能性」というときの意味が異なっている。芸術作品は想像力と機知の能力がもたらす一種の可能世界の構築であるとする、ヴォルフ以後、とりわけ初期啓蒙主義時代に見られた詩学は、論理学と一体化した形而上学的基礎を想定しうる学であると同時に、論理学とは異なり、独自の経験的基盤をもつ、創作についての学でもある。

従来、ヴォルフ以後の詩学の歴史を、模倣説の克服という物語に仕上げるのが好んで行われてきた。そこには、「模倣から想像へ」という定型的な視点があり、その根底には、再現か創造かという単純な二項対立がある。しかし、啓蒙主義時代の自然模倣説は、その名が与える印象とは違い、自然の再現を旨とする芸術論でない。用語法ではなく、詩学全体のコンセプトを見据えて検討するなら、ここまで述べてきたヴォルフの想像力概念は、機知の概念などと組み合わせて広義に捉えれば、啓蒙主義時代の模倣説の核にあると考えても、特に矛盾を来さないものである。

冒頭にも述べたように、ヴォルフは膨大な著作を残したが、詩学や美学に相当する内容のみを念頭に置いて書かれた著作はない。しかし、想像力や機知の概念が、以後の詩学に与えた影響は明らかである。ヴォルフには、それとは別に、完全性に立脚した美の概念や、作品が受容者に与える作用といった視点からの発言も見られる。こうした観念は、バウムガルテンなど、以後の美学史の原型となっている。ただしそうした観点からの美学史の記述と、想像力概念を組み込む形で、作品の創作に焦点を当てている詩学史の記述とでは、「ヴォルフ学派」の在り方、その描き方が異なり、結果として、見る角度によってヴォルフ像が異なってきたように思われる。

論理学から切断された美学の誕生を語ることは、論理学的な悟性には見えない対象の発見過程について語ることであり、その場合、美とは、おそらく、構造的布置の変化が産み出したそうした対象の名称である。バウムガルテンにおける近代美学の誕生という便利な通説も、一つの鳥瞰的な物語としてやや物足りない面があるとしたら、それは、『美学』というタイトルの本が書かれたという事実を過大評価しているように感じられたり、過去を振り返って誰がどこまで歩を進めたかという形で歴史を再構成する一種の勝利者史観や、英雄列伝式の主体概念が目についたりするからだと思われる。それを受けて書かれるべき

は、論理的なもの論理的でないものの配置をめぐるより包括的で構造的な精神史である。

本稿で見た想像力は、夢などで独立した形で活動することもあれば、論理的な悟性と協調して象徴的認識を下支えする形で活動することもある。その意味で、想像力は、論理的でないものと論理的なものとの継ぎ目をめぐって存在している能力である。ヴォルフ心理学では、想像力は、部分の類似や隣接といった関係から対象を取り替えて不在の対象を呼び出す能力であり、類似に気づく機知の能力の基礎でもある。論理的悟性が司るのは、そうした類似性の世界ではなく、認識対象とそのメルクマールの関係を明確にする世界であり、ある対象のメルクマールの一覧表が完成したとき、その認識は完全になる。

こうした観点を踏まえつつ設定されるヴォルフ受容を語るための複数の物語という問題は興味深い、その考察は別の機会に譲ることとしたい。

---

<sup>1</sup> Christian Wolff: Vernünftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt (= Deutsche Metaphysik); Gesammelte Werke Abteilung I, Bd.2. Nachdruck der [11.] Ausgabe. Halle, 1751 この書からの引用は、引用の後に § 番号を補う形で示す。なお、本稿では、1次文献となるヴォルフのテキストは以下の全集に拠っている: Christian Wolff: Gesammelte Werke. Hildesheim [u.a.]: Olms, 1962-

<sup>2</sup> 初版に付された序言の日付は「1719年12月23日」である。

<sup>3</sup> 導入の意味をもつ第1章は非常に短い。あとは各章100頁前後で、第3章のみ200頁以上の分量がある。本稿で言及する第3章と第5章以外では、第2章は、矛盾律と充足理由律について論じ、さらに事物一般を議論の対象としている。第4章は「世界について」、第6章は「神について」取り扱っている。我々の感覚からするとこの「形而上学」は幾つもの学問を包含した総合的なもので、他の諸学の基礎となる規範的・文法的なものであると同時に、かなりの程度事典的であると言える。

<sup>4</sup> 慣例に従って「心理学」と訳している言葉は、精神論とか哲学と言った方が、我々の語感には近いものである。なお、ヴォルフの場合、その経歴と著述の言語との間には相関がある。ヴォルフのラテン語の著作群が、ハレ大学を追われマールブルクに移って以降に、ヨーロッパの教養層を念頭において書かれたものであるのに対し、ドイツ語の著作群は、大学での講義が機縁となって生まれてきたものである。時間的に先行するドイツ語の著作群とラテン語の著作群の間には種々の差異が認められるものの、後者は前者を踏まえて書かれており、全体の体系と個々の内容において根本的に異なることはないと考えられている。もっともドイツ語の用語法は、『著者の書き方について』でも示されているように、学術的なラテン語を忠実に移し替えようとした翻訳語ではなく、ドイツ語という言語の日常的な用法に従おうとしたものであることは念頭において置かなければならない。両者のうち、当時大きな影響力をもったのはドイツ語の著作群の方である。ヴォルフは、数学の私講師としての経験を経て、1706年、ライプニッツの助力でハレ大学の数学と自然学の教授となる。1707年から講義を開始し、後には哲学関係の講義も行うようになるが、周知のように、1721年に中国人の道徳について講演した際、異教徒である孔子を称え自らの倫理観との一致を述べた「スキャンダル」が決定的な契機となって、1723年にプロイセンから追放される。この追放は国王フリードリヒ＝ヴィルヘルム1世の裁断によるもので、ヴォルフが再びハレに戻るのには、啓蒙専制君主として名高いフリードリヒ2世が即位する1740年のことである。

<sup>5</sup> 「私はここではまだ、心とは何か、そこでどのような変化が生じるか、ということを示す必要はない。私が意図しているのは、今のところは、我々が日頃の経験から心について知覚している事柄を語ることのみである。」(§ 191)

<sup>6</sup> ただしヴォルフは、「デカルト主義者たち」のように「意識しえないものは心の中に存在しえない」と主張しているわけではないとして誤解しないよう警告し、我々が意識する以上のものについては、意識しうる事柄を明確にした後、推論によって解明するとしている(§ 193)。意識されるものがすべてだと考えるわけではないが、明証的に意識され、それについて判明な認識に到達できるものが議論の出発点となる。すでに第1章の冒頭、すなわちこの書の冒頭がこうした戦略からの言説となっている。「我々は我々自身と他の事物を意識している。そのことは、感覚が完全に奪われている者でない限り、誰も疑い得ない。」(§ 1) 意識の明証性は疑い得ないとして、このことから出発する哲学は、デカルト的との印象を与える。もっとも、ヴォルフがデカルトの「コギト」に頻繁に言及したとしても、そのことがデカルトほど方法論的な出発点としての意義があるわけではない、としている論考もある。ヴォ

- ルフの場合、主観性の哲学が問題になっているわけではなく、心身の予定調和という前提の下では、身体についての研究と心についての研究の重要性は同じ、というのがその理由である。Vgl. Cornelis-Anthonie van Peursen: *Ars inveiendi im Rahmen der Metaphysik Christian Wolffs. Die Rolle der ars inveniendi*. S.82f. In: Werner Schneiders (Hg.): *CHRISTIAN WOLFF 1679-1754*. Hamburg, 1983, S.66-88
- 7 「今や我々は、どこに心の本質があり、精神一般の本質があるかを探求し、我々が心について知覚していること、先に述べたことがどのようにしてそこで根拠付けられているかを探求しなければならない。その際、心について、経験からすぐには導かれぬ様々な事柄が論じられることになる。」 (§ 727)
- 8 この考え方は、ライプニッツ＝ヴォルフ学派にとっては、その論理的な真理観を反映した基本プログラムと呼べるものである。Vgl. Christian Wolff: *Vernünftige Gedanken von den Kräften des menschlichen Verstandes und ihrem richtigen Gebrauche in Erkenntnis der Wahrheit überhaupt (= Deutsche Logik); Gesammelte Werke Abteilung I, Bd.1* 『人間悟性の諸能力と真理一般の認識におけるその正しい使用についての理性的考察』、通称『ドイツ語論理学』は、1713年から26年にかけて出版されたドイツ語著作群の最初のものであるが、「事物の概念について」述べたその第1章において、概念の明晰性、判明性について以下のように論じられている。「我々の有する概念が、物事が現れたときに・それを再び識別するのに十分である場合、その概念は明晰(klar)である。逆に、その物事を再び識別するのに十分でない場合は、明晰ではない。我々は色について明晰な概念を有している。というのも、我々は色を識別できるし、それが現れた場合には、互いに区別できるからである。同様に、我々は怒りについて明晰な概念を有している。誰かが怒っていれば、それと識別できるからである。」(『ドイツ語論理学』§ 9) 「概念が明晰な場合、我々は、我々がその物事を識別するメルクマールを他の者に言うことができるか、少なくとも、自らそうしたメルクマールを特に順々に表象することができるか、あるいは、そうしたことができない状態にあるか、どちらかである。前者の場合には、明晰な概念は判明(deutlich)である。後者の場合は、判明ではない。例えば、時計について、それは機械で、指針が回転することで時刻を示すか、鐘を鳴らすことで時刻を知らせる、ということが言えるなら、明晰で判明な概念を有していることになる。」(『ドイツ語論理学』§ 13) 『ドイツ語論理学』の第1章では、さらに、精密性、完全性についての定義がこれに続く。「判明な概念は精密か、精密でないかのどちらかである。人が挙げるメルクマールが、その物事を常に識別し、他の全てのものから区別するのに十分な場合に、その概念は精密である。逆に、ある物事を他のものから区別するすべてのメルクマールを挙げることができず、幾つかのものしか挙げるできない場合には、精密ではない」(『ドイツ語論理学』§ 15) 「最後に、判明な概念は完全か不完全かのどちらかである。我々の概念が完全なのは、それによって事物が識別されるメルクマールについても、明晰かつ判明な概念を有している場合である」(『ドイツ語論理学』§ 16) 概念は通常は複合的であるということがここで議論の前提となっている。概念をメルクマールに分解でき、そのメルクマールについても判明性が得られれば、概念が完全なものとなるという、分析的に真理に到る手続きがこうした定義の概観からも窺える。
- 9 ヴォルフは、判明な概念は普遍性に立脚した判断につながる、と考えている。Aという事物のメルクマールが分かり、それがBという種に属することが分かれば、Bに属するすべての事物が性質Cをもつということから、三段論法により、Aという事物にはCという性質があるということが分かる、と言う (§ 336 以下)。人間の欲動との関係では、「欲動には判明な認識は求められておらず、明晰な認識でよい」 (§ 414) ため、人間は判明ではない表象によって理由なく役に立たないことをしてしまうことが多く、判明な認識によって欲動を制御しなければならない (§ 416)、と述べられる。従って、判明な認識を行う才能が、自らの欲動を制御する才能となる。善悪の識別も、概念が明晰な段階に留まる場合には、欲動による区別になってしまうが (§ 432)、判明な認識を伴う場合は、理性によって物事の本質と見せかけの影にすぎない部分とが区別される (§ 433)。従って、認識の判明性は自由意志という問題とも関わってくる。判明でない認識からは悟性の関わらない感性的な欲求が生じ (§ 434)、感性的欲求は象徴的な認識よりも心に強い印象を残してしまうのである (§ 503)。
- 10 ヴォルフは、想像力と記憶力は訓練によって徐々にではあるが拡張できる、という議論も書き添えている (§ 262 以下)。初めて代数学を学んだ頃の思い出話で、夜ベッドに横になったときに、終わりまで頭の中で計算できるように徐々になっていた、と述べられている下りは、一読した印象では、話そのものは微笑ましいが、そうした事象の理解の仕方については、やはり単なる想像力の問題の域を越えていて、論理的な思考活動を紙に書きつけずに行っていると言った方が当たっているようにも思われる。もともと、ヴォルフが問題にしているのは、おそらく、紙に書いた場合には最後の一行だけに集中できることを、頭の中だけで計算した場合には、計算の能力以外にそれ以前の部分を正確に思い起こす記憶と想像が必要だ、ということなのであろう。こうした考察を経て、ヴォルフは、「想像や記憶の力を拡大しようと思えば、判明性が大いに役立つ」と結論づけている (§ 266)。先にも触れたように、感覚や想像は単独では決して判明なものにはならないので、こうした結論は、分析的な思考と協調することで想像力や記憶力も増してくる、という意味だと解釈される。この章の後続の箇所では、一つの思考の明晰性を増すための能力である注意力について議論していく中で、想像力と記憶力を拡張するのに注意力の果たす貢献も少なくないと述べられているが (§ 269)、分析的な思考との協調という同じ文脈での議論の一つと受け止めることができる。

- 
- 11 言葉は、ヴォルフにとって、「思考の記号」である(§ 291)。こうした捉え方や言い方は、これ以降この世紀ではよくなされる。事物に対してそれを捉えた観念があり、その観念に対してそれを定着させた言葉が記号としてある。ヴォルフは、言葉と概念の記号関係は恣意的につくられた関係であるから、言葉は「恣意的な記号」に分類される、と言う(§ 295)。その理由としてヴォルフは、些か平板ではあるが、一つの事物を指示する言葉が様々な言語で異なっているということを挙げている(§ 296)。
- 12 母語を含めて、その言葉が話されている場所では、言葉と物の記号関係を通じて言語が習得されるが(本文後続箇所の§ 297 の引用を参照)、生活する地で話されていない言語を習得する場合には、言葉と物との間に確立された記号関係に先立って、新しく習得する言語とすでに理解している言語の言葉同士の間と同様の記号関係がつくられる、という意味のことをヴォルフは述べている(§ 298)。
- 13 Vgl. Hans- Jürgen Engfer: *Philosophie als Analysis*. Stuttgart-Bad Cannstatt, 1982, S.103f.(§ 10)
- 14 「想像力」という言葉の指し示す能力は、常に一定とは限らない。従って、精神史記述において概念史風の再構成を試みる者は、この点にも十分注意を払わなければならない。「想像力」という言葉で呼ばれている能力の変化を跡づけ、そこから性急に精神史の転換を演繹するような議論では、用語法にぶれがあつて、同じ能力が別の名前と呼ばれているにすぎない場合に、議論の枠組みが概ね変わっていないことを見落としてしまう可能性がある。しかし、用語法のぶれに注意を払った上でさらに、精神の諸能力の枠組みに変化が認められるなら、そこに精神史の地殻変動を読みとることができる。精神の諸能力を形而上学などの基礎的な学で規定した上で、その諸能力を個々の学における記述の道具立てに用いるという知の戦略を取っている場合、精神の諸能力のシフトが変わるといふことは、個々の学の構成原理として、精神の諸能力というパラダイムによって個々の学を分節化する基本構造は同じでも、論理学を基準とした基礎的な配置が、より精確に言えば、明晰判明知という観念を一つのスケールとして構成された位階による基礎的な配置が揺らいでいくことを意味するように思われる。
- 15 「我々が心の内に気づく通常の変化が知覚である。知覚は、我々の感覚器官が動かしている物体を表象している。物体は複合的なものである。…従って、知覚とは、外的な感覚器官における変化がきっかけで起こる、単純なものにおける複合的なものの表象である。」(§ 749) 「我々が何かを想像するとき、それは同じように物的なもの、我々が普段知覚しているものや、自ら組み立てたものである。従って、ここでも、単純なものにおいて複合的なものが表象されている。この点において、想像は知覚と一致する。」(§ 750) ヴォルフは、このように規定した後、知覚や想像を、絵や彫像など一般に「像」と呼ばれるものと比較している。複合的なものを表象するという点では、知覚や想像も、絵や彫像などの像と一致しているので、像と呼ばれるが、「知覚や想像は、単純なものにおいて起こり、絵や彫像は複合的なものにおいて成り立つので、その点で絵や彫像とは異なっている」。絵は、平面において複合的なものを表象するし、彫像は空間において複合的なものを表象する、と言う(§ 751)。ヴォルフがこのような言い方をするのは、身体や物体は考える能力をもたないし、逆に思考が複合的なものに帰せられることもない、という心身二元論から、心は単純なものである、という前提に立っているからである(§ 742)。従って、ここで言う「複合性」は実体としての複合性であり、表象が成立する場の性質である。想像が構成的に成立することや、表象そのものが言語記号によって分析されることは先に見た通りであり、そうした意味での複合性とは別種のことを述べていることに注意する必要がある。このあとヴォルフが「予定調和」という観念を導入する議論も、最初からこうした心身二元論に立っている。